

### 小笠原の欧米系島民の来歴

小笠原に最初に定住したのは 5 人の西洋人と約 20 人のハワイ人であった。彼らは自分たちで食べ物を作り、捕鯨船と交易を行った。そして欧米人や太平洋諸島民が島にやって来たことで、時とともにコミュニティは大きくなっていった。島をめぐるにはイギリス、アメリカが領有権を主張しあっていたが、1876 年に正式に日本の一部となり、同年、日本政府は（国のために）37 人を定住者として島に送り込んだ。6 年後の 1882 年には島の全住民が日本国籍となったが、最初に定住した非日系人の子孫は日本人住民とは異なる存在として見られた。

1944 年には全島民が本土へ避難されたが、戦後、小笠原が米国海軍の基地となると、最初に定住した非日系人の子孫 129 人の帰還が米国海軍によって認められた。これらの人々は欧米系島民と呼ばれた。日本人の子孫である住民の帰還がはじめて認められたのは、アメリカが島の統治権を日本に返還した 1968 年のことであった。

小笠原での文化は多国籍の歴史を反映しており、欧米、ハワイ、ポリネシア、そして日本という、様々な国の言語と伝統の融合から成り立っている。古くからの住民は英語と日本語、その他いくつかの言語の語彙や文法が組み込まれたこの土地特有の方言を今でも話すことができる。しかし、日本の他の地域との接触が増え、日本語による国の学校教育が行われるようになったため、島では標準日本語しか話せない若者が多くなっている。